

雑感

受験生に気の毒だった共通テスト

■ 2年目の共通テスト。予想通り難易度が上昇したが、半端ない上昇は想定外で、平均点がIAで38点は前代未聞。コロナ禍で、窮屈な高校生活を送らざるを得なかった彼らに、追い打ちをかけるような非情さだ。

■ 分量過多：IAのページ数が昨年より減ったのは、データの分析のページ数が減ったためだが、それでも多い。一方、IIBは大幅にページ数を増やした。短時間にそれだけ多くの情報を処理して問題を解かなければならないという大変さ。

さらに、こんなに多くの設問が必要なの？最後の設問はどう見ても余分でしょうという問題も多い。例えばIA第4問(4)、第5問(3)；IIB第1問[2](4)、第4問(2)などなど。これでもかこれでもかと続く設問に、お腹いっぱいである。

■ 太郎と花子は必要か：分量を増やしている原因の1つは、太郎と花子を登場させた会話である。それが果たして問題に功を奏しているのか？例えば、IIB第1問[1]では、(2)の最初のページは不要である。設問全体でも、2人の会話をなしにして、すっきりした誘導にできる。

またIIB第4問の2人の会話も、問題解決の有効なヒントになっているかどうか疑問である。この問題は設定を理解し、漸化式を導くのに苦労する問題で、正答率も相当悪いと思われる。その部分については、

$\boxed{\text{エ}}=p$ 、 $\boxed{\text{オ}}=q$ としたとき、図のACの傾きが2、BCの傾きが1であることから、

$$\frac{q}{p-a_n}=2, \quad \frac{q-b_n}{p-a_n}=1$$

より求めると一気である。この

方法は太郎さんの考え方に近いが、より平易な方法である。

マスク姿の2人のイラストまで入れて「友達と一緒に問題を解いています」というフレンドリーに見せる設定は、その実、分量を増やし、視野を狭めさせるまやかashiでしかない。

■ 選択問題の難易差：難易度は受験生個々人の得手不得手にもかかわるので、軽々には言えないが、IAでは確率が標準的だが、整数は計算や分量を含めて大変、図形は苦手な受験生が多いだけに分量を含めて大変だっただろう。IIBでは統計が連続型の確率密度関数が登場するが、平易。数列は解答にかかる時間などを考えれば難問。ベクトルは標準的。「ー」だけのマークは、昨年の第2日程に出題があるものの珍しい。

■ 思わぬ伏兵：IAの平均点が低いのは分量のせいだけではない。第1問[2]の図1の水平方向と鉛直方向で異なる縮尺は分かりづらい。

「図1は、縦方向に4倍されている」と書けば良いだけのことである。

[3](2)も困惑する。AB、ACの長さの最大値が共に $2R=6$ であることに気づけばそれだけで結果的には何とかなるのだが、果たして三角形の成立条件など他の条件は考えなくて良いのかなどと考えると、悩ましい。ADがABの2次関数で、頂点で最大でないとなると、なおのこと心配になる(よく見れば、 $\boxed{\text{ヒ}}$ が整数だから、少しは安心できるのだが…)。

■ 果たして、意図通りの問題内容か：大学入試センターは「大学入学共通テストの果たす役割」として、「大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題作成：平成21年告示高等学校学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視した問題作成を行います」と言っている。

今回の出題は、そういった狙いにきちんと沿ったものだったのだろうか。理解・思考し、判断していくには相応の時間がかかるのが一般である。にもかかわらず、このような分量過多の問題を課し、電光石火のような処理スピードを求めるのは意図と反するのではないか。共通テストは、教科書の章末問題レベルまでの基本を問えばよい。じっくり考えさせる問題は、国公立で言えば大学ごとが2次試験で自分の大学に合わせた形・レベルで問えばよいのである。

